

みんなの「なんな-の?」を伝えるこども記者のための新聞(毎月1回発行)

信毎こども記者ニュース

発行/こども記者クラブ(信濃毎日新聞地域活動部) 〒380-8546 長野市南県町657 TEL.026-236-3110 FAX.026-236-3193 no.16

おも つた てん **思い伝える11825点** こども新聞コンクール

小学生を対象にした信濃毎日新聞社の第11回長野県こども新聞コンクールの審査会が9月27日、長野市の信毎本社であり、入賞作品の優秀賞15点と奨励賞30点を選びました。コンクールは、小学生のみなさんが身の回りでできごとやニュースに関心を持ち、たくさんの人に情報を伝える力をつけてほしいと毎年開いています。今年の応募数は、今までで一番多い1万1825点。昨年より2188点増え、初めて1万点をこえました。



▲全県から1万点をこえる新聞が寄せられました
第4回中学生新聞スクラップ作品コンクールの審査も、同じ会場で行いました。みんなも中学生になったら挑戦してね!

戦争テーマの新聞も
審査会は、県内6地区ごとにあらかじめ選んだ計135点について、県教育委員会の溝口純永さんと6人の審査員が、選考ポイントとして内容を見て、入賞作を選びました。コンクールを担当する信毎販売局企画管理部の岡宗さんは「今年もバラエティーに富んだ作品が

そろいました。戦後65年といつてもあつたか、長野空襲や家族、お年寄りの体験など、戦争をテーマにした新聞の応募がいつもの年より多くありました。話をしています。
◆主な作品は、10月16日付信濃毎日新聞の特集紙面で紹介します。



★選考のポイント★

- ①テーマがしっかりしているか
- ②現場に出向くなど、よく取材をしているか
- ③レイアウトや写真、イラストの使い方が工夫されているか
- ④楽しんで作っている様子や、書いた人の感動、思いが伝わってくるか

なんとなく決めたテーマではなく、自分がなぜだろうと思ったことなど、これを取り上げたい、調べてみたいという気持ちをはっきりと持って、記事を書いている作品が多かったです。いろいろな角度から取材やインタビューがあり、4コマまんがを入れるなど、よく考えて紙面構成をしているなど思いました。



長野県教育委員会教学指導課 指導室長の溝口純永先生

次の取材教室は…

戦争中の赤ちゃんのこと おばあちゃん助産師さん に聞いてみよう!

日時=10月9日[土]
13:30~16:30
会場=大町公民館

今回の取材教室では、太平洋戦争より前から助産師だった太田実子さん(94才!)のお話を聞きます。戦争中、日本は国民に子どもをたくさん産むように呼びかけました。当時、お母さんが子どもを産む場所はほとんどが自宅でした。戦争中の出産、子育ての大変さなどを取材してみよう!

自分の名前(よみがなも)、住所、電話番号、学年、保護者の人の名前、「こども取材教室に参加希望」と書いて、信毎こども記者クラブへハガキかファクス、電話で申し込んでください。

参加したい人は…

みんな最初は一年生

早くやっておく!

記者1年生は警察担当から始まります。朝夕、夜と警察署に足を運び、事件や事故、火事があれば現場に直行。「現場をおさえる」ことが大切です。ある深夜、男が閉店後のレストランにおし入り、約百万円をうばって逃げる強盗事件が発生しました。人質はすぐ解放されましたが、犯人は逃げたまま。警察署は緊張感に包まれ、署員たちはあいさつも返してくれません。捜査車両をやっと見つけても「うろろろするなよ」。なかなかきつかけがつかめません。事件から3日目の午前、前日とは少し違う雰囲気。警察署で感じました。午後、早く警察署に行こうと思いい、会社を出ようとする、デスクに呼び止められました。「あの展示会、早く記事にしてよ」。取材は4日前。「まだいいか」と先のばしにしています。あせる気持ちで記事を書き終え、警察署に入ると通りがかりの署員が「おっ、早いじゃん」。犯人が連れて来られたのは5分前。「現場」をおさえられませんでした。午前2時、犯人逮捕の発表を聞きながら、親に何度も言われた言葉を思い出していました。「できることは早くやつておきなさい」。

「入社19年目」地域活動部こども記者クラブを担当する山崎文智記者

ここだけのヒミツ! ベテラン記者の失敗談